

実践報告

実践型講義及び実習を通しての和文理解の試み 「現代における和文の在り方と日本のもてなし文 理解を目的とした特別学外実習実践報告」

An Attempt to Understand Japanese Culture through Practical Lectures and Training Practical report of Special Off-Campus Training to Understand Japanese Hospitality and Culture in the Modern Era

薦 洋子 (武蔵丘短期大学非常勤講師) 植松 大介※ 太田 あや子※ 八板 将明※
※武蔵丘短期大学

Yoko Tsuta Daisuke Uematsu Ayako Ota Masaaki Yaita

Abstract

現在武蔵丘短期大学 (以下大学) 健康マネジメント専攻 (以下専攻) では、実社会で活躍できる人財教育の一環として 3 つのホスピタリティ系講義と 1 つのサービス実習が展開されている。自身が担当している「マナー・プロトコール (国際儀礼)」と「和文と作法」の講義においては、知識としての理解ではなく、体得し実践の場で行動に移すことができ初めて理解できたものとして位置づけている。今回は、「和文理解」において、日本の文を理解するとともに、海外から見る日本の強みの再発見、また他者への配慮、今後あるべき日本の姿や日本文の在り方を考察する力を身につけることを目的とした、専攻が毎年実施している「川越散策特別学外実習」に関する実践報告である。

キーワード：和文、作法、マナー、異文理解、もてなし

I はじめに

現在大学専攻では実社会において、「社会人」として、また「国際社会に生きる日本人」として基礎的な知識とスキルを会得し、社会に貢献できる人財育成を目的とした 3 つの講義 (「ホスピタリティ基礎演習」「マナー・プロトコール」「和文と作法」) と 1 つの実習 (「サービス・接遇実習」) が展開されている。大学が掲げる目標、「社会貢献」「専門知識の習得」「人格教育」を見据え、中でも「プロトコール (国際儀礼)」と「和文」の理解と体得は、これからのグローバル社会を生きる者として最重要案件として位置づけられている。今回はこれらの講義と実習を通して学んだことを基に、実践型実習として専攻が毎年実施している「川越散策特別学外実習」の実施内容と、その成果を含めた実践報告をする。

II 実施概要

1) 学外実習概要

実習名：川越散策特別学外実習

実施時期：2019 年、2021 年、2022 年 7 月

(2020 年度は新型コロナウイルス感染症
拡大防止の観点より実施を見送り)

開催場所：埼玉県川越市 小江戸川越蔵造りの町

対象学生：健康マネジメント専攻「和文と作法」
「ホスピタリティ基礎演習」履修者

実施人数：2019 年 22 名、2021 年 18 名、
2022 年 25 名

(2021 年は「和文と作法」履修者の
みで実施。2019 年、2022 年は
「ホスピタリティ基礎演習」履修者と
合同で実施)

指導教員：薦 洋子 (武蔵丘短期大学非常勤講師)

引率教員：武蔵丘短期大学専任教員 (植松大介、
太田あや子、八板将明)

経費：交通費、食費等を含め全て受講者負担

2) 事前準備

講義「マナー・プロトコール」と「和文と作法」にて、公共の場における振舞いやマナー、グローバルな視点からの文化や習慣、宗教による差異について事前に学んだ。また、現在引き継がれている日本の文化、改めて見直すべき和文について考察。歴史的、文化的側面についての理解度も高めた。複数のグループに分かれ、情報処理室のパソコンを用いて散策のコースのプランニングを行う。開催地域の

歴史、現存する歴史的建造物、神社仏閣、受け継がれる祭事、名所、和を感じるポイントなどを事前調査した。集約した情報をしおりとして作成し、グループ全員と随行教員の人数分を事前に配布。しおりの内容はレポート内容に準ずるが、不十分な場合は事前に追加作成することも認めた。1 グループにつき3~6名程度で構成し、さらに公平性を期すため、くじ引き抽選にて班分けを行った。グループごとにSNS (LINE) グループを作成、指導教員を招待し、当日の様子や緊急時における対応ができる体制を構築させた。

3) 学外実習

埼玉県川越市小江戸川越蔵造りの町にて学外実習を実施。グループごとに作成したルートに従い散策。海外からの旅行者や国内の観光客が興味を示す和を感じるスポット、歴史などを調査する。店舗における日本的なもてなしの表現、海外にも誇れる和文化の良さを体感し、レポートとして報告する。

III 実施内容および結果

1. テーマ

『川越散策をしながら、身近に和とおもてなしを感じる』をベースに、各自テーマを設定

2. 学外実施内容

1) 集合、点呼

西武新宿線本川越駅改札前集合。集団行動における時間厳守、人通りの多いところを避け、発声なども含め周囲に配慮することを指導した。また夏場の実施ということもあり、体調管理も徹底するよう注意を促した。

2) スケジュール

蔵町に徒歩にて移動し、グループごとに事前に作成したルートに従って散策。見学や体験プランは各グループで可能な金額を設定し、予約が必要な場合は店舗に事前に連絡。観光客も多い場所であること、コロナ禍であることを踏まえ、昼食等は席の確保が難しい場合も考慮し、状況によりルートの変更や、グループではなく個人での入店も許可した。万が一現場でルートを変更する場合は、都度グループLINEで報告することを徹底させた。再集合は川越氷川神社の氷川会館前、会館解体後は日陰を選んで集合。神社参拝後、全員で集合写真を撮影し解散した。

3) 服装

当日の服装のテーマは「日本の夏」とした。自分なりの日本の夏を表現し、メイクを含め、動きやすさと身だしなみ、自分なりの個性の表現を意識するよう説明した。またへそ出しなど露出度の多い服装やジャージなどその場に適さない服装は不可とし、講義の一環であると同時に、社会の一員である自覚と責任を持つこと、特にコロナ禍においては他者配慮を中心に感染症対策、熱中症対策等を万全に行うことを徹底させた。さらに講義内で浴衣の自装も学んでいたため、浴衣での参加も可能とした。また、随行教員も自ら浴衣や夏着物を着用して参加した。

4) 持参物

カメラ、筆記用具、しおり（これら全てスマホ対応可）を持参。各自必要な熱中症対策グッズも併せて持参することを指示した。

5) レポート作成

(1)グループ毎にテーマを決め、そのテーマに沿ったルートを決める。

(2)自由行動中の視察箇所は6カ所以上とし、最低5カ所についてレポートを作成。

(3)レポートの作成、提出は各自。レポートには、テーマ、クラス、氏名、グループ名、グループメンバーを記載した表紙を添付のこと。

(4)各カ所について各自学んだこと、感じたこと等も記述。

ex. 「和を感じるポイント」「なぜ和を感じたのか」「歴史」「文化的要素」「海外の人から見たらどう見えるか、どのように紹介するか」「今後どのように残し伝えていくべきか」等

(5)各視察箇所写真撮影。説明文と一致するように風景写真や施設の写真、店前の様子や建物、商品など数枚撮影しておく。各ポイントでグループごとの集合写真も撮影し、説明文に添付のこと

(6)執筆要領

レポートの作成に関して以下の要領に準じて作成するよう指導した。

①レポートはワードで作成、最低5頁以上（表紙は除く）

②タイトル → 『【氏名】川越レポート』

フォントはメイリオ、文字の大きさは10.5ポイント

6) 注意事項

当日の気候によっては、休憩をこまめにとれるようなルートを選択すること。和カフェも対象内とする。スタンド式屋台などの多い観光地であるという特性から、買い食いは可能とするが周囲に迷惑が掛からぬよう、また車道も近いことから歩きながら食べることは不可とする。浴衣の場合は、肩より上に肘を揚げないよう指導した。

3. 散策箇所例と感想（学生レポートより抜粋）

1) 名所

(1) 一番街蔵造りの街並み

(2) 菓子屋横丁

「ただ歩いているだけでも“和”を感じられる雰囲気なので何度も往復したくなる。のれんや建物の雰囲気など、日本ならではの文化がたくさん詰まったところだと感じるので、外国からの観光客にも楽しんでもらいたい」

(3) 時の鐘

創建された江戸時代の初期から、暮らしに欠かせない「時」を告げてきた川越のシンボル

(4) 稲荷小路

2) 神社仏閣

(1) 川越熊野神社

室町時代に紀州熊野から分祀された。開運・縁結び・厄除けの神社。参道の「足踏み健康ロード」は、足裏のツボを刺激して健康へのご利益を願う名所である

(2) 川越冰川神社

3) 食文化、食による観光客誘致

(1) 川越の名物グルメ

「これがかき氷」「ミセスハンバーガー」「覚王山フルーツ大福 弁財天」「川越プリン(川越芋ソフト)」

(2) 休憩箇所

①glin coffee

ロゴが「地域に根ざし、生活の一部になるように」と、土に根を伸ばすデザインになっている

②うどん土麦

うどんに使用している麦は、埼玉県の地物の小麦を主に使っている独自ブレンド

③QUON chocolate

チョコレートを通じて日本各地の食文化を発信。

店の3つのこだわりのうちのひとつが「Discovery Japan -日本の再探求-」

④STARBUCKS 川越鐘つき通り店

「普段目にするものとは全く違い、日本を感じた。通常は緑色のイメージだが、茶色で街並みに色を合わせていてとても良い。写真を撮っている方が多く、海外の方からしてもとても新鮮なのだと感じた」「街並みに対して敬意を一番に考えて作られているのを感じる。建物は和風で木材を多く使用しており、屋根は瓦屋根になっている。看板も木材を使用している店名はアルファベットで表記。派手な色を使用していないので景観を守っていることがよくわかる。

店舗の奥には緑豊かな庭やテラス席があり、お茶を飲みながら美しい日本庭園を楽しむことができる。店に入って、木材を多く使用していて自然の中にいるような雰囲気を感じた。」

⑤レモネード by レモニカ

「店内は通常の洋風だが、外観は和風の建物で瓦屋根になっている。お店の看板も派手な色を使わず、落ち着いた色をしている。街の景観を保護するために派手な色を使わないようにしていることがわかった。」

⑥足湯喫茶椿や

「足湯の目の前におしゃれな和傘が並んでいた。また、風鈴があるなど足湯を楽しみながら目でも耳でも楽しむことができた。大人数で入れる足湯だけではなく、一人でも楽しめるように“桶”が置いてあることに和を感じた。足湯を楽しみながら一緒に川越のご当地サイダーを飲んだ。芋のお菓子が付いてきて川越ならではの味を楽しむことができた。周りが木で囲まれているなかで静かに足湯を堪能することが良かった。」

4) その他

(1)ヤオコー川越美術館

川越市に本社があるスーパーマーケットチェーンストアのヤオコーが、創業120周年記念として川越市に開館した美術館。「美術館に来たのは初めてだったのでとても感動した。2つのエリアしかない小さな美術館であったがとても満足できた。空間演出もとても素晴らしく自分の好きな雰囲気である。たくさんの絵が飾ってあり綺麗なものから現実的なリアルな絵もあり色々考えさせられた。自分にとっても

とても新鮮であったので海外の方も新鮮に感じていただけると思う。静かで薄暗く絵に集中できるので他の美術館にも行ってみたいと思った。」

(2) スカラ座

「見たことのない昔らしい映画館であった。映画の種類が3種類しかなく、週代わりで上映映画が変わるところが面白い。イオンモールの映画館では見られないような映画だったため、ここでしか見られないこともとても魅力的だと感じた。」

(3) 手焼きせんべい体験

1) 十人十色

最初に煎餅の焼き方の説明を聞き、その後、自分で焼いた煎餅の大きさにより成績がつく

4. 結果

1) 事前授業

「和文化と作法」の授業内にてグループ分けし、「和文化とは」「海外からみた日本人」「和のもてなしとは」「“和の心”を言葉にすると」「日本人の性格」「残すべき和文化」「和食と日本料理の違い」「なくなってしまった和文化」について各グループ1テーマで討論・発表会を実施した。また、実習前には川越散策コースの事前調査を実施した。

その時点での状況からすると、店舗選択の際に当該店舗がレポート対象となるかどうか不明で、確認にきた学生が多く見受けられた。海外から流入した文化に既に慣れ親しんでいるため、昔からある日本の文化との区別が難しい様子であった。その点、馴染みのある「スターバックスコーヒー」等の他店舗と比較することにより、どこが違うのか、何のためにどんな工夫が施されているのかなど認知し、逆に日本らしさを再発見した学生が多いように感じられた。

これを踏まえ、現在自分たちが暮らしている日本の良さや強みを再発見し、海外の人からはどのように見えているのか、どのようなところに和文化を感じるのかを客観的に見られるように心がけるよう、また、その利点を活かせる視点を持つよう促した。併せて、自分たちが当たり前だと思っていることも文化や価値観が異なれば非常識になる場合もあることを説明し、まずは己を知ることが意識させた。また、見た目だけの「かわいい」ではなく、その裏に

どのような思いが込められているのかにも考えを及ぼせるよう指導した。

陶芸など体験型店舗では受講代や材料費などの費用が別途発生することにも気づき、計画に反映させたようであった。社会に出ると金銭感覚の違いも生まれ、配慮が必要ということにも思いが及んだことと察した。

2) 学外実習

実施日が「和文化と作法」の講義終了後、盛夏の炎天下となったため、休憩と水分摂取を特に推奨。そのためか視察箇所もカフェや建物内が多く見られた。和にスポットを当てたりサーチの経験がないため、建物や街づくりへの配慮などを目の当たりにし、新鮮な印象を受けたという意見が散見される。

また、映画館など昭和の文化は既に過去の文化となっており、今ではなくなってしまった和文化と感じて当時の風習にまで思いを馳せた感想も見受けられた。おしぼりや風鈴の音など日本ならではの夏の気遣いや心遣いを知り、五感で感じるひとつ一つにも一挙手一投足、相手への配慮がなされていることに気づいた者もいた。

グループは1、2年合同の年もあり、経費も受講者負担であることから、コース選定時に訪問先の費用問題や散策中の休憩のとり方等、集団行動におけるグループ内での他者への気配りや配慮も学んだようである。

浴衣を着用して参加した者の中には、鼻緒擦れを起こす者もいたが、教員持参の絆創膏にて対応した。

3) 実施後

まずは、暑かったけれども良い思い出になったというのが大半の感想であった。その中でも今回の実習においては、日本ならではの気遣いという強みに気づいた者が多かったように思われる。

当時の建造物が火事の延焼を防ぐための設計になっていること、時の鐘というシンボルが当時の人々の生活を支える重要な役割を担っていたことなど、今まで何気なく目や耳にしていたものが、脈々と受け継がれた叡智の賜物であり、そのひとつ一つに意味があることなど気づくことができた者もいた。

それらの歴史を守るためにも、またこれから重要となることが予想される海外からの観光客誘致の面においても街を挙げての対策がなされており、昔な

がらの街の景観を保護するために派手な色を使わない、電線は地中に埋め込むなどの工夫がなされていることに気づいた者もいる。その対策にも費用が掛かり、これらの維持が今後の課題にもなりうることまで、自分なりに先々を読む力を養うことなど促した。

IV まとめ

この度の実習実施場所は武蔵丘短期大学からも近く、学生も一度は訪れたことのある「小江戸川越」であったが、今回のように和文化を意識した散策は初めての者が多数であった。それゆえに新たな発見や気づきも多く、この実習は学生にとっても非常に有意義なものであったと考える。だが、例年炎天下での学外実習となったため暑さが先に立ち、学生にとっては体力の消耗となった点は否めない。また2021年、2022年の実施においては、コロナ禍で縁遠くなっていた集団行動や、平日頃から交流のない他学年の学生との行動に不安を感じる者もいた。こちらに関しては実際に行ってみると特に問題はなかったと報告があったが、実際のところは、個人のパーソナリティによりコミュニケーションの得手不得手もあったであろうと推察される。

しかしながら昨今、訪日客や留学生らから、「日本人は日本文化について尋ねても答えられる人が少ない」「自分の意見を言わない」「自国の文化なのに知らない人さえいる」などと耳にする機会も多くなっていることを鑑み、国際化するにあたって、自分で体験し肌で感じた自国の文化を自分で伝える術も必要となってくるであろう。これから更に国際化がすすむ社会においては、共に新しい社会を築き上げる可能性がある諸外国の人々の文化を理解し尊重するためには、まずは自国の文化を知らなければその差異に気づくことは困難であることが推察される。これまで実施してきた実習が、この一抹の不安を抱くような現状を、学生自ら打破するための一歩となったのではないかと思われる。

「なぜそうするのか」。

相手を思いやる気持ちや相手を尊重する心遣いは、国や民族が違っていても大差はないものである。日本人が大切に紡いできた文化を知り、その根底にある意味を理解して他者への思いやりを育むことが、自己

実現への近道ともなるであろう。ひいては、優れた人格を有する人財へと成長することを目標とする武蔵丘短期大学の理念にも繋がることと確信している。

情報化や国際化がめまぐるしく進む社会においては、価値観やライフスタイルなどますます複雑化していく傾向にある。特に、今般のようなコロナ禍の状況において、他者への思いやりと自分を律する心が必要となる集団行動を体験でき、楽しさの中に学びのある時間になったことは良い経験となったのではないだろうか。実社会において即役立つスキルを実践的に学習することを念頭に置き、多くの意識付けを継続的に行いながらより高いハードルを設け、今後もより効果的な講義実習運営を実施したいと考える。



2019年



2021年



2022年

V 謝辞

2019年実施開始以降、特別学外川越散策実習においては武蔵丘短期大学健康マネジメント専攻全学生が参加しており、様々な指導法の実践と共有、今後の対策について検討することができた。有効かつ効果的な実習運営方法を日々研鑽する機会をいただいたことに多大なる感謝を申し上げる。

また、この学外実習を全面的にサポートしてくださった、健康マネジメント専攻の教員に厚く御礼を申し上げる。

【参考文献】

「さすが！」といわせる大人のマナー講座
特定非営利法人日本マナー・プロトコール協会
PHP 研究所 (2012年)